

資料紹介

関西大学図書館所蔵の野里梅園『標有梅』と大田南畝の序文について

並河暢子

はじめに

野里梅園は大坂の南組惣年寄を勤めた人物で、古物を好み、各地に伝わる古器物や古書画、古文書などを模写・影写等して収集した。収集された模写・影写類は、資料帳として『標有梅』と名付けられ残されている。野里は、この『標有梅』などを原資料として文政十一年に『梅園奇賞』を、天保五年に『本朝画図品目』を編集・刊行している^①。

『標有梅』は各所に伝えられている自筆本や転写本が知られるが、関西大学図書館も写本を一本所蔵する。(以下、関大本『標有梅』本稿では、『標有梅』の写本のなかで、比較的注目されてこなかった関大本『標有梅』と、そこに掲載される大田南畝の序文を紹介したい。

一 関大本『標有梅』の書誌と特徴

関大本『標有梅』は、巻一から巻五の五冊からなる。表紙左肩に題簽を貼り、書名の標有梅および巻数を記す。各冊の法量は次の通りである。

巻一	縦二七・三 cm × 横一九・七 cm
巻二	縦二六・六 cm × 横一九・五 cm
巻三	縦二七・六 cm × 横一九・八 cm
巻四	縦二七・九 cm × 横一九・九 cm
巻五	縦二八・七 cm × 横二〇・三 cm

各巻の見返しには、「関西大学図書館蔵記」印が、各巻の本文冒頭右下には、「梅園」印が押される。

丁数は巻一が三三三丁、巻二が三六六丁、巻三が三五四丁、巻四が三五四丁、巻五が四〇丁で二五丁裏から四〇丁裏は白紙である。巻一から巻四の本紙は、薄い雁皮紙と考えられる紙を用い、装束の紋様などを中心に写しとったものを紙縫綴にし、袋の中には透けないように本紙よりは厚い紙を一枚挟む。巻五のみ他巻よりも厚めの紙を本紙に用い、袋内には紙を挟まず、写した古器物などの紙を本紙に貼り込むことが中心になる。

巻一から巻四の掲載対象は、狩衣などの装束の紋様や神文、古鏡の紋様、絵巻にみえる紋様などであり、各種「紋様」に重きを置いた内容である。一方巻五では、冒頭に東大寺法華堂内の手水屋の絵から始まり、

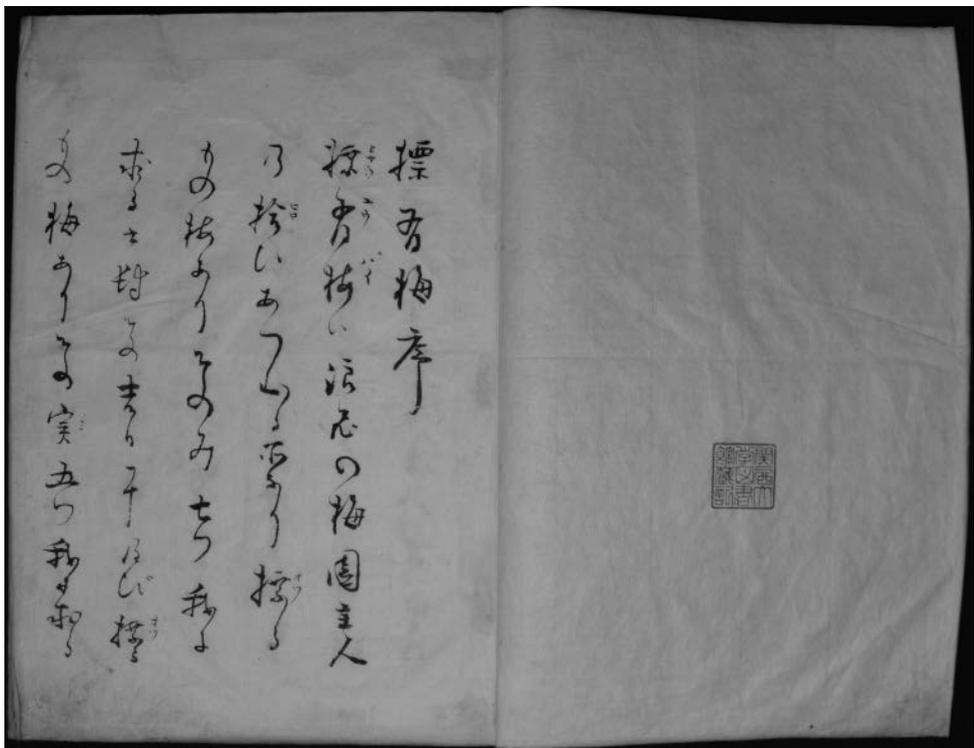
さまざまな古器物等の模写類を収載する。こうした掲載対象の違いは、写し方や紙質の違いにも表れていると考えられ、巻一から巻四は薄い紙を用いて、下に置いた紋様を写しとり、その紙を本紙として綴じており、巻五は別紙に模写したものを本紙に収まる様に切り取り、貼りつけることが主となる。

また各巻に押された「梅園」印から、関大本『標有梅』は野里梅園の自筆と考えられ、巻五の途中二五丁裏から巻末まで白紙が続くこと等からも、稿本と思われる。

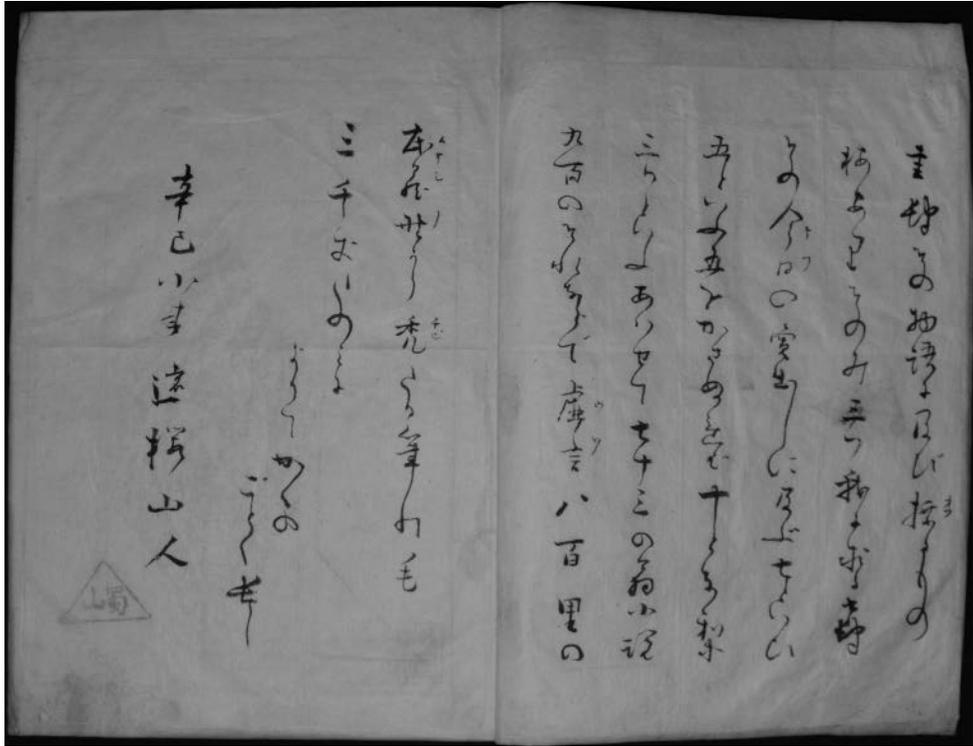
二 関大本にみえる大田南畝の序文

関大本『標有梅』巻一の大田南畝序文は、巻一の一丁表・裏・二丁表にかけて貼り込まれている。^④ 貼り込まれた紙には、縦の折り目が見えるので、江戸にいる大田南畝より書簡のように折り畳まれて、大坂の野里梅園のもとに送られてきたものと推測できる。

大田南畝の序文は次のようである。



【写真1】関大本『標有梅』巻一 大田南畝序文 一丁表



【写真2】 関大本『標有梅』巻一 大田南畝序文 一丁裏・二丁表

標有梅序

標有梅は浪花の梅園主人

の拾いあつむる所なり。標る

もの梅あり、そのみ七つ。我に

求る書肆、その吉日に及び、標る

もの梅あり、その実五つ。我に求る

書肆、その物語に及び、標るもの

梅あり、そのみ三つ。我に求る書肆、

その今日の売出しに及ぶ。七といひ

五といふ五をかさぬれば十となり、

三つといふ、あはせて七十三の翁。小説

九百のそれならで、虚言八百里の

武蔵野から、禿たる筆の毛

三千丈、たのみに

よりてかくの

ごとく長し。

辛巳小春 遠桜山人 (印「蜀山」)

大田南畝の序文は、文政四年（一八二二）十月に記されたもので、書名の典拠とされた中国の古典『詩経』に載る詩「標有梅」に基づきながらも、南畝が巧みにアレンジした文章である。浪花の梅園主人が拾い集めた資料がついに売り出されるに及んだことを宣言する内容で、おちた梅の實の数に自らの年齢、七十三を詠み込んでいる。最後には武蔵野に

いる南畝が（大坂の）野里梅園に頼まれて書いたものが長くなつたと結ぶ。署名は遠桜山人で、「蜀山」の印を押す。

浜田義一郎ほか編『大田南畝全集』第十八巻には、関大本『標有梅』大田南畝の序文翻刻が掲載され、自筆序文とする。

三 野里梅園と大田南畝

『標有梅』を作成・編集した野里梅園（一七八五～未詳）は名を嵩年、通称を四郎左衛門といい、煎茶を嗜み、古物の鑑定に長じ、狂歌や書画もよくした人物として評される。大坂町奉行のもとで、市政を担う惣年寄（南組）を勤めた。その職務のなかには、本屋仲間と奉行所の間に入り、本屋仲間から開版許可を求めて提出される稿本の調査もあった。

著書には、『標有梅』を原資料として、各地の社寺などに所蔵される古器物や古書画、現在の考古遺物にあたる対象の模写等を収めた好古圖譜『梅園奇賞』がある。これは文政十一年（一八二八）に刊行され、翌十二年に大坂の書肆河内屋源七郎により売り弘められた。『梅園奇賞』巻頭の題字は、松軒主人こと、浜松藩主水野忠邦が揮毫している。

また多治比郁夫氏によると、梅園の文事は狂歌をもつて始まり、終生継続したという。梅園の狂歌師としての名は大江千里で、その父も浦辺沖風の名で狂歌を詠み、ともに鶴廼屋平佐丸の門下であった。

平亭銀鷄『難波金城在番中 銀鷄雜記』三には、梅園の父を次のように紹介する。

常盤町壹丁目谷丁少シ西へ入

○狂歌師 鶴廼屋平佐磨

大坂三年寄の内 野里四郎左衛門隠居 出生江戸の人
故あつて此地へ来り住居すること二十年 南畝社中也

浪花にても社中多くして頗風流家の高名なり 年

八十一歳にして壯健無事（下略）

平亭銀鷄は、上州甘楽郡七日市の前田家の藩医で、主君が天保五年（一八三四）八月四日から翌天保六年八月四日まで加番として大坂に赴任したため、藩医として同行していた。その際に付き合ひのあつた人物として、梅園の父を狂歌師として記し、現在は隠居しているが、江戸生まれで二十年前に大坂に住むようになり、大坂三郷の惣年寄を勤めた人物と紹介する。さらに南畝社中といい、浪花においても社中を持ち、風流家として名が高いと評する。

梅園自身も父の次に「古物家」として紹介されている。

古物家 野里四郎左衛門

上にいふ処の三年寄の一人なり 号を梅園といふ 書画

并二人形雑器等の古物夥くたくはふ 其古物の

目録を記したる小冊子あり 狂歌を能し画を

このむ 年二十二月下旬出府して 御城へ出

年始の御祝儀申上るよし 至て家柄なる人なり

長崎にある処の三年寄同前の役儀なるよし 大坂

にても市中の用 格別のことにして江戸の年寄るも

其勢強し

これらのことから、野里梅園の父は江戸から大坂に移住した人物で、

大田南畝の社中と目される人物であったことがわかる。そして大坂において父子とも惣年寄を勤め（勤めた）人物でありながらも、狂歌師としての顔も持っていた。また野里梅園自身のものには、古物が夥しく収集されていたようで、その目録である小冊子の存在も記される。

平亭銀鷄以外にも、主君の大坂城代就任により来坂した学者や武士たちの日記に野里梅園は記され、「多く古器古書画を蔵す」（『懽堂日曆』文政十二年八月十三日条）、「古物好の風流家也」（『大坂日記』天保三年三月三日条）として知られる人物であった¹²。

一方の大田南畝¹³（一七四九〜一八二三）は、ことばをあやつる才能に恵まれ、漢詩を出発点にしながらも、十代で狂詩・狂文作者として江戸文壇に登場し、二十代で狂歌ブームの中心人物として世に知られ、戯作者としても作品を残した。今年（二〇二三年）は没後二〇〇年となる年である。

南畝は雅号であり、通称直二郎、字は子相、名は覃、狂歌師としての狂名は、四方赤良といった。五十代での大坂銅座勤務を経て、銅の異名である「蜀山居士」にちなんだ、蜀山人の雅号も用いた。

大田家は代々、幕府の徒士衆を勤め、七十俵五人扶持の御目見以下の御家人で、下級の幕臣であった。生家の家格は高くはなく、豊かなものではなかったが、多賀谷常安について漢文を学び始め、十五歳のとき国学の師として内山賀邸に入門、十八歳の時には儒学の師として松崎観海に入門し学問を続けた。内山賀邸の門下では、和文を自在に綴る基盤を養い、師の賀邸が狂歌をも詠む人であったため、その門下には、師をま

じえた門人たちが、愉快な戯文や狂詩、狂歌を作って楽しむおらかな気風があったようだ¹⁴。後に、南畝とともに江戸の狂歌を大成した平秩東作、唐衣橘洲、朱楽菅江なども賀邸門下であった。

天明の狂歌ブームを経て、南畝は寛政六年（一七九四）、松平定信の人材登用政策の一つである学問吟味を優秀な成績で合格した後、寛政八年に支配勘定に抜擢される。そして自身は、能吏としての道を歩みながらも、文事にも関わり続け、広い交遊関係を築き、身分的には格上の旗本の文人たちとの交流も重ねている¹⁵。

寛政十三年（二月五日に改元して享和元年）一月十一日には、大坂銅座出張を命じられ、三月から翌享和二年（一八〇二）三月まで、大坂に滞在した¹⁶。勤務先の銅座は土佐堀川に臨む過書町にあり、鉾山から粗銅を集荷し、精錬して長崎から輸出する銅や国内向けの地売銅の鑄造、販売、輸送などの管理統制を行った¹⁷。

南畝は、この在坂生活のなかで、銅座勤務をこなしながらも、公務のいとまに大坂行楽に出かけ、交遊関係も広がった。そのなかで、本草学者で文人、古今の珍本や器物の大コレクターであった木村兼葭堂とも会い、その死去の直前まで双方行き来を重ねている¹⁸。

野里梅園と大田南畝との関係は、関大本『標有梅』の序文以外には、序文と同年の文政四年（一八二二）に近松門左衛門墓碑銘を、大田南畝の撰文によって、野里梅園が建立していることが確認できる¹⁹。

以上より野里梅園の父は江戸より移住し、南畝の社中でもあったとすると、大田南畝とは江戸以来の交流が続いていたのだろう。大坂に移つ

てからも、狂歌との関わりや、古文物に興味を持つ者同士の繋がり等から、『標有梅』序文や近松門左衛門墓碑銘の撰文の依頼が梅園から南畝へなされたと考えられる。

おわりに

以上、関大本『標有梅』の紹介とともに、そこに収載される大田南畝自筆序文について見てきた。序文は文政四年（一八二二）十月に記されているので、南畝七十三歳、梅園三十八歳のときのものである。南畝は、文政六年に亡くなるので、晩年といえる時期である。

本資料紹介で述べてきたことをまとめると次のようである。

- 一、関大本『標有梅』は、巻一から巻五の五冊本であり、各巻の本文冒頭に押された「梅園」印から、野里梅園の自筆本と考えられる。
- 二、巻一から巻四まで本紙は薄い雁皮紙と考えられる紙を用い、装束の紋様などを中心に写しとっている。巻五の本紙は巻一から巻四までよりも厚めの紙を用い、古器物を模写した紙を貼り込むことが中心となり、収載内容の変化が見える。また巻五の二五丁裏以降巻末までは白紙が続くこと等から、稿本と言える。
- 三、大田南畝の自筆序文は、巻一の一丁表から二丁表にかけて、本紙よりも少し小さめの三枚の紙に書かれ、それを貼り込む形で掲載されている。貼り込まれた紙には、折り目が見えることから、大田南畝から野里梅園のもとに書簡のように送られたと推測できる。

関大本『標有梅』に収載される大田南畝の序文は、野里梅園の『標有

梅』が世に売り出されることを伝える内容をもつ。現在は、稿本として各所に所蔵される自筆本や転写本が知られる『標有梅』であるが、南畝の序文からは、野里が『標有梅』の出版を目論んでいたことを思わせる。こうした序文は、他の写本には見えず、関大本『標有梅』のみであり、野里が自身の著作として出版を準備していたことがわかる貴重な資料である。

【注】

- ① 多治比郁夫「野里梅園のこと」（森銃三ほか編『随筆百花苑』第一〇巻付録第一五号、中央公論社、一九八四年）、同『京阪文芸史料』三（青裳堂書店、二〇〇五年再録）。
- ② 『標有梅』は、神宮文庫本に三冊（うち上・下の二冊は自筆本、神宮文庫本の転写本を早稲田大学図書館が所蔵する）、東京都立中央図書館加賀文庫に十冊、西尾市岩瀬文庫に二冊（うち一冊は、東京都立中央図書館の加賀文庫本の十冊に続くもの、ほか一冊は神宮文庫本上の抄録）。東京都立中央図書館加賀文庫本十冊は、森銃三「読書日記」（森銃三『森銃三著作集統編第十四巻』中央公論社、一九九四年）二一九頁に「野里梅園の『標有梅』原本十冊、『梅園奇賞』の原をなす書なり。その忠実なる模写影写大部分を占め、間々拓本あり。…」とある。また同氏著作集第九巻に収める「書物」（三九六頁）には、「大阪の野本（ママ）梅園の貼込帖『標有梅』は内容に富んだもので、原本は洗雲亭文庫の所蔵だったが、その欠けてある一巻が、三河の岩瀬文庫に入つてみた。」と記す。洗雲亭文庫は、加賀文庫の原蔵者加賀豊三郎氏の文庫。

- ③ 徳田誠志「関西大学博物館所蔵木村兼葭堂旧蔵の馬形埴輪について」〔『陔陵』七九、二〇一九年〕
- ④ 各丁に貼り込まれた序文は三枚で、各縦二四・七cm×横一七・六cmを測る。
- ⑤ 吉川幸次郎『中国詩人選集第一巻 詩経国風上』（岩波書店、一九五八年）八三・八四頁。
- ⑥ 署名の「遠桜山人」は、文化六年（一八〇九）二月に小金井での花見の際に号したものの（六十一歳）、印の「蜀山」は、享和元年（一八一〇）の大坂銅座出張からの号である（五十三歳）。野口武彦『蜀山残雨 大田南畝と江戸文明』（新潮社、二〇〇三年）参照。
- ⑦ 浜田義一郎編『大田南畝全集』第十八巻（岩波書店、一九八八年）五六八頁。本稿も基本的にこの翻刻を参照し、一部訂正を加えた。
- ⑧ 前掲注①参照。
- ⑨ 前掲注①参照。
- ⑩ 中村幸彦ほか編『浪花の噂話』（汲古書院、二〇〇三年）二九五頁、藪田貫『武士の町 大坂』（講談社、二〇二〇年）一五一頁。
- ⑪ 中村幸彦ほか編『浪花の噂話』（汲古書院、二〇〇三年）二九六頁。
- ⑫ 山崎勝昭『野里梅園をめぐる人々』『俗地と文人——幕末期大坂の萩原広道——』（ユニウス、二〇一八年）九二・一〇四頁。
- ⑬ 浜田義一郎『人物叢書 大田南畝』（吉川弘文館、一九六三年）、野口武彦『蜀山残雨 大田南畝と江戸文明』（新潮社、二〇〇三年）、沓掛良彦『ミネルヴァ日本評伝選 大田南畝——詩は詩佛書は米庵に狂歌おれ——』（ミネルヴァ書房、二〇〇七年）。
- ⑭ 前掲注⑬沓掛良彦著書二二頁。
- ⑮ 宮崎修多「大田南畝における雅と俗」（中野三敏編『日本の近世 第一二

巻 文学と美術の成熟』中央公論社、一九九三年）

- ⑬ 前掲注⑬浜田義一郎著書一六八〜一八〇頁、野口武彦著書一八五〜二一八頁、沓掛良彦著書一七一〜一九二頁。

- ⑭ 「銅座」（太田勝也）『国史大辞典』第二〇巻（吉川弘文館、一九八九年）、浅尾直弘（監修）・住友資料館（編集）『住友の歴史』上（思文閣出版、二〇一三年）一四二〜一四五頁。

- ⑮ 前掲注⑬野口武彦著書二二二頁。

- ⑯ 浜田義一郎編『大田南畝全集』第十八巻（岩波書店、一九八八年）六五〇・六五一頁。

【付記】

関西大学図書館所蔵『標有梅』については、同大客員教授徳田誠志先生が、その存在に注目され調査を行われ、それを引き継ぐ形で調査を進めました。本稿作成にあつては、同先生に多大なご教示を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

